

# ゴールドラッシュのあとで

## 政治経済的变化とアニューワ人の対応

栗本英世

### はじめに——辺境の人類学

今日、アフリカのどの国家においても、行政や商品経済は国のすみずみにまで浸透しているといっただろう。人類学者が研究対象としてきた、相対的に孤立し、自給自足的な生業経済を営む「伝統的社会」は、言葉の純粋な意味ではもはや存在しない（かつて存在しなかったかもしれないが）。

しかし、相変わらず、地理的にも政治経済的空間においても「辺境」に暮らす諸民族の研究は、人類学の主要な関心のひとつであり続けている。ただし、そこで人類学者が見出すのは、自然と共に生きる予定調和的な狩猟採集民、牧畜民や半農半牧民の姿ではない。むしろ、商品経済の浸透にうまく対応できない結果の貧困化、都市への出稼ぎによる人口流出、教育の普及による世代間の価値観の断絶などの現象を目の当たりにすることであろう。また、内戦や飢餓といった大きな災厄に見舞われるのも、こうした辺境地域であることが多い。そして、先進国による大規模な救援・援助活動や、国家の開発プロジェクトが、住民の意志や必要とは関係なく、突然に開始され、人々の生活に大きな影響を及ぼしていく。つまり、辺境に位置するというまさにその事実ゆえに、人類学者の赴く遠隔の地には現代アフリカの矛盾が集約的に現われているのである。

辺境の諸民族は、国家の枠組の中ではマイノリティであり、政治・経済上の権力機構からはおおむね排除されている。そしてこの不平等は解消されるどころか、ますます増大しつつあるようである。こうした状況を、人類学は研究課題としていかに取り込めばよいのだろうか。この問題を考える第一歩として、ここでは、私がエチオピアでのフィールド調査中(1988年11月～1989年2月、1989年8月～1991年2月)に見聞したことのスケッチを試みたい。そのテーマは、政治経済的变化に対する、辺境の一民族アニューワの主体的な対応である。

### 1 近年の政治経済的变化

エチオピアの首都アディス・アベバから車で西へ700キロメートルばかり走ると、延々と続いた高地が、スーダンへとつながる低地へとすどく落ちこんでいる。低地におりると、そこはアニューワ人(Anywaa, Anuakとも表記される)の世界である。

エチオピア高地の主要な住民は、ティグレ人やアムハラ人など、アフロアジア語族のセム系に属する人々である。政治経済の中枢を握っているのも彼らといっただよい。それに対して、アニューワ人はナイル＝サハラ語族のナイル系に属し、エチオピア高地人ではなく、南部スーダンのヌエル人、ディンカ人、シルック人などと文化的つながりが深い。そのため、アニューワ人はエチオピアの住民

でありながら、高地人からは「アフリカ人」つまり「黒人」とみなされ、国家の一員としての正当な扱いを受けてこなかった。アニューワの人口は約5万人で、4000万人のエチオピア全体からすれば少数派である。

アニューワ人が、自分たちの存在を左右する実体として国家を感じ始めたのは、1974年の社会主義革命以後のことであろう。革命以前、アニューワはナイル川支流の河畔でメイズやモロコシを栽培し、漁撈や狩猟を営んで、基本的には自給自足的な生活を送っていた。各集落は伝統的な政治首長の下に統合されていた。教育・医療・交通などの行政サービスはきわめて立ち遅れており、こうした政府の無関心の下で、アニューワはある程度であれ自律性を維持していたのである。

1974年に始まった社会主義革命は、アニューワにも大きな社会的変革をもたらした。首長制を含む、伝統的とみなされる制度や慣習は、反動的であるとして廃止された。そして政府は人々を、農民組合、青年組合に組織し、いつでも政治的目的のために動員できるようにした。政治教育、税金の徴収、そして徴兵はこれらの組織を通じて行なわれたのである。

革命後の変化は、もちろん経済的側面にも及んだ。これにはいくつかの要因がからみあって作用している。1983年以降、国営農場、機械化農業計画、ダム建設による灌漑計画などの国家プロジェクトがアニューワランドで開始された。同時期に、高地から政府が強制的に移住させたティグレ人、アムハラ人、カンバータ人などから成る6万5000人の移民が、アニューワランドの各地に入植した。そして、エチオピア革命とは無関係であるが、83年から拡大したスーダン内戦の結果、約30万人の難民がアニューワランドに流入し、2カ所の難民キャンプに収容された。先に述べたように、アニュー

ワの人口は約5万人である。彼らは自分の土地に膨大な外来者を受け容れることになった。

以上の国家プロジェクトや難民キャンプの運営のため、道路網が急速に整備され、それは商業路として利用されることになった。スーダン難民と強制移民に対する援助物資の一部(メイズ、食用油、砂糖、ビスケット、魚やコーンビーフの缶詰、衣類、毛布、せっけんなど)が市場に出回り、この地域は一大交易センターになったのである。

そのため、地域の中心地であるガンベラの町には、高地から多数の商人が来住して、小売店、宿屋、酒場を開いた。酒場で働く女たちも高地から出稼ぎにやってきた。そして、難民キャンプのあるイタンとピニユド、国家プロジェクトの集中するアボボにも新しく町が形成されたのである。

過去数年に生じた、このような目まぐるしい変化の結果、アニューワは否応なく貨幣経済の波に巻き込まれることになった。まず、農民に課せられた税金の支払い、教育費、衣服・靴・せっけんなどの購入のために現金が必要になった。彼らはいかにして現金を獲得したのだろうか。

主要生産物であるメイズは、援助物資が大量に出回ったため、大きく値崩れした。たとえば、1989年2月には、メイズ一袋(90キログラム)は難民キャンプでは3~5ブルというただ同然の値段、ガンベラの町でも25ブルであった(公定レートでは1ブルは約70円。タバコ1箱は2ブル、セッケン1個は1ブルである)。その結果、アニューワの農民はメイズの供給者ではなく、購入者になってしまった。生産意欲と農業生産は確実に低下し、現金の必要性は一層強まったのである。

## 2 ゴールドラッシュの到来

それでは、アニューワにとって選択可能な現金収

入の道は何であるのか。現在のところ、女性にとっては酒造り、男性にとっては砂金採りが主要な手段だといえる。酒についていえば、ここ数年のあいだに、従来のドブクロに加えて蒸留酒の飲用が急速に広まり、女性の重要な収入源になった。しかし、酒を買うのはアニューワだけだから、市場は閉じられている。

それに対して、砂金採りは多額の現金を外部からアニューワにもたらす。この仕事に従事する男は、常時数千人に達すると思われる。現在、あちこちの村を訪れても、畑を耕している若者を見かけることはまずない。少数の若者は町で学校に行くか働いており、残りは兵隊にとられるか、砂金の仕事をするかしているのである。砂金採りは、アニューワにとって今や最も重要な生業になった。しかし、大量の若者が村を離れてこの仕事に就くようになったのは、ここ数年のことにすぎない。

砂金採りの場所は、アニューワランドの東端、高地から流れ出す川沿いに分布している。

私が長期滞在した小さな町、アボボの東20キロメートルの森の中には、大規模な砂金採り場がある。ルンガと呼ばれるこの場所で砂金が見つかったのは4年前のことで、現在は9カ所のキャンプがあり、スーダン領内も含むアニューワランドの全土から来た1000人以上の男たちが仕事をしている。作業場は、乾季に水の涸れる小川沿いにある。仕事はそう複雑ではない。川床に深さ2～4メートルの穴を掘り、砂金を含む層から土砂を採る。その土砂を少しずつ直径60センチメートルほどの木製の盆に入れ、水たまりの水につけて前後に揺すり、砂金を選別するのである。プロセスは単純だが、根気と体力のいる仕事だ。

良質な土壌を掘りあてると、1日に3グラムの砂金を得ることも可能だという。ちなみに、砂金1グラムの値段は、アボボ、ガンベラ、アディス・

アベバの順に、40、50、70ブルである。仮に月に30グラムの砂金を得てアボボで換金したとすると、1200ブルの収入になる。小学校の新任教員の月給が200ブル、大学講師の月給は700ブル程度であることを考えると、これはきわめて高額である。

採掘場は、たんに砂金を採るという経済活動を行なう場であるだけではない。この場合は、アニューワの男たちにとって、国家からの避難所でもある。そこに居れば、税金と徴兵から逃れることができる。採掘場は、役人や他民族の者がいっさい来ないアニューワの聖域であって、多くの男は自動小銃で武装している。

もうひとつの側面は、そこで働く男たちの需要のゆえに、採掘場が大きな市場になっていることである。ルンガで働く1000人の男たちが毎日消費する食料やせっけん、タバコなどはかなりの量になる。これらの物資は、アニューワの男たちが町や難民キャンプで購入し、ルンガまで運んでくる。いずれの品も仕入れ値の3倍で売れるから、これはいい商売である。

ともあれ、砂金はアニューワに多額の現金をもたらした。彼らはこの現金をどう使うのか。一部は村に残された家族の生活費や教育費にも使われるが、ほとんど飲酒や、ラジオカセット、最新流行の衣服や靴の購入に消え去ってしまう。ガンベラやアボボの町では、砂金を売って現金を手にした若者が、知り合いを引き連れて、高地人の経営する酒場で豪遊している姿をよく見かけた。そして、現金を使い果たすと、採掘場へと戻って行くのである。

つまり、社会経済的变化の結果生じた現金獲得の必要性が、男たちを砂金採りへと駆り立て、より一層の消費生活を続けるために、さらに仕事を続けるという図式が成り立っているのである。

### 3 今後の展望

アニューワの男たちで、砂金で稼いだ現金を銀行に預けたり、それを元手にして別の商売を始めたりするものはひとりもない。そもそも、商業という経済行為や、商人というカテゴリー自体が、アニューワの価値観にとっては外来で、社会に根を下していないもののように思える。商人を意味するアニューワ語が、アムハラ語からの借用であるのは示唆的である。店で物を買うときに値切ることさえ、彼らは不得意だ。

高地からの強制移民とアニューワを比べてみると、両者の商業に対する態度の違いは歴然としている。農民として連れてこられた前者は、すぐに卵や野菜などの農産物を町の市場で売りはじめ、日用雑貨の商いにも手を広げ、得た現金で、アニューワの西隣りに住む牧畜民ヌエルから牛を購入する。彼らにとっては、農民であると同時に商人であることはあたりまえのことであり、現金を次々に転がして資本を増やしていくのは身についた行為なのである。それに対して、残念ながらというべきか、私は上記のような経済活動をするアニューワの話は聞いたことがない。「企業家精神」は欠如しているのである。

外在的な条件を見ても、大商人から零細商人、使用人に至るまですべて高地人に独占されている町の商業的世界に、アニューワが新たにいくいこんでいくのは困難である。

それでは、せっかくアニューワが稼いだ現金は、消費されることによって、結局は高地人の商人の手中に収まる現在の構図は、変わりようがないのだろうか。私は、長い目で見れば変わるかもしれないと考えている。そのさい注目したいのは、アニューワの砂金仲買人である。彼らはもともと自分です砂金を採っていたが、小金がたまると、現地で砂金を買いつけアディス・アベバに持って行って売るといった仕事を始めた。私の知る限り、現在4名の仲買人がいて、それぞれ年に数回、200グラム程度の砂金を隠し持って（検問所で見つかると思取される）首都を往復している。産地と首都では1グラム当りの価格差は30ブルだから、一回の旅行で数千ブルの利益があがる。4名の中には、ガンベラの町に酒場の建設と、中古自動車の購入を計画中の者がそれぞれ1名いた。これらがうまくいけば、彼らはアニューワで最初の商人になることだろう。

幸いなことに、今までのところ、砂金採りの仕事はアニューワが独占している。将来も、国家が介入し、アニューワを排除して砂金を管理しようとする限り（もしそうなれば、アニューワは武力抵抗するだろう）、砂金採りはアニューワが自らの意志で行なえる、最も重要な現金収入源であり続けるものと考えられる。その結果、商業という経済活動が社会の内部に組み込まれるとともに、より一層の貨幣経済の浸透、個人主義的傾向の増大、貧富の格差の拡大など、社会を根底から揺り動かす変化が生じるものと予想されるのである。

（くりもと・えいせい／東京外国語大学  
アジア・アフリカ言語文化研究所）